

Title	浮世床史學：十八世紀シリアの珍籍
Sub Title	
Author	前嶋, 信次(Maejima, Shinji)
Publisher	三田史学会
Publication year	1959
Jtitle	史学 Vol.32, No.3 (1959. 11) ,p.126(370)- 130(374)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19591100-0126

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

浮世床史學

—十八世紀シリアの珍藉—

前 嶋 信 次

—

このごろ評判になってきたと思われるのはシリアの首府ダマスクスのザーヒリーヤ（國立圖書館）にある古色蒼然たる二部の稿本である。これはまだ刊方されたことはないものだが、二部とも内容は同じで、二十一年間（一七四一—一七六一年）にわたる丹念な日記である。

およそ箇人の日記類が史料として珍重されることは、いくらも例のあることではあるが、ここにあげたものを書いたのは歴史家でも、政治家や軍人、または文人でもなく、全く市井のひと、ある床屋の親方であった點がとりわけて珍らしがられている。商賣がら世間が廣いにちがないから、そういう人々の中に文才と獨特の史眼を具えたものが現われたらこれは面白いものを残せるにちがない。

その人の名はアハマド・アル・ブダイリーというのだが、更にアル・ハルラクというよび名がつくのはアラビア語で「床屋」「理髮師」の義である。まことに耳さどく、かつ觀察力に富んだひとだったというが、まだ徒弟として修業をしていたころから、店にやってくる學者たちに可愛がられた。長じて親方となってからは、ひいき客の中には何人ものかの地では一流の學者たちがあつたそうである。アラブ諸國の床屋さんの店というものは、一昔前までは、終日常連がすわりこんで世間話に花をさかせ、談論風發のにぎわいを示すのが常だったそうで、江戸時代の髮結床などに大部似たところがあつたようである。

アハマド親方は仕事しながら、多勢の客のつたえるそういう世間の動きを、毎晩、刻明に記録して倦まなかつたのである。この親方の興味は政治向きのことなどにはさして燃え上らず、その中心はむしろ一般民衆の生活状態というようなものにそそがれていた。たとえば物價高に苦しむ様とか、總督たちの横暴さ、治安の悪さ、疫病や地震、民心のゆるみなどという方面のことは詳細に

記録にとどめてあるとのことである。

アハマド親方が生きていたころのシリア、つまり十八世紀の丁度中ごろは、あまりいい時代ではなかった。アラブ民族が政治的にも精神的にも最も萎微した、いわばどん底時代であり、コンスタンティノープルで睨みをきかしているオスマン帝國政府のもと、トルコ族の支配下に殆ど全民族をあげて服従していた時代なのである。アラビア語の古典は書庫の奥で虫にくわれ、朽ちはてるにまかされ、民族としての自負自覺なども殆ど地を拂っていた時代である。

ダマスクスにもトルコの總督（ワリー）がいて、随分、勝手なことをしていた。親方が日記を書き續けた二十一年間に、都合七人のワリーが赴任してきたのであるが、中でも一七四三年から同五六年まで、足かけ十四年間も在任したアサード・パシヤ・アル・アザムという人物の時代が日記の期間の三分の二を占めているのである。贅澤な建築をすることが好きな總督で、ダマスクスやハママーのアザム居館など今でも名所として残っているそうである。

親方の日記によると、代々の總督は、私腹を肥やすために、食糧品の一手專賣のようなことを行い、賄賂をとりこみ、物價の監督を怠って人民を苦しめたという。小麥の産地が幸に蝗害も早魃もなく豊作となると、總督は干渉して麥の値段が下がるのを禁じた。これは農民を保護するためでなく、自分が利益を獨占するためだった。たとえば一七四九年には麥は豊作で、ダマスクスのパンはやすくなると期待され、市民は大よろこびで慶祝していた。所がどうであろうアサード・パシヤは布告を出し、パン屋たちに命じてやすいパンを賣ることを禁じてしまった。それは自分がハママー近在に小麥栽培地を持っていたからで、親方によると、この總督は毎年、麥を大量にしまいこみ、端境期になると、高價に賣って儲けたのみならず、こうして市民の危機を救ってやるのだと恩にきせては威張っていたという。

人民の方でも時々は憤懣を爆發させた。一七四五年には一揆が起ってダマスクスのセライ（州廳）に押かけた。するとアサード・パシヤは文句があるならカーディー（裁判官）の所へ行けと云った。そちらへまわると、役

人どもが待ちかまえていて、杖でなぐりつけた。一揆側も投石してこれにむくいたが、役人らが發砲したので、若干の負傷者を殘して逃げた。すると面白いことに、忠誠と武勇をもって鳴る有名なエニチェリ軍團の兵士たちが、一揆側に同情してこれを助けたので、裁判官は身をもって逃れ、その部下の何人かが殺されてしまった。裁判所は掠奪され、市場は閉鎖されるという大騒ぎになったとある。

二

治安の悪いことも人民を迷惑させた。ことに地方軍隊と中央政府直屬のエニチェリ、及びこのエニチェリと總督の私兵たちとは互に不和で、しばしば街頭で争闘した。親方が、一番恐ろしい思い出として語っているのは一七五八年の騷擾だったそうである。これはエニチェリ兵が新任總督アブダラー・アッ・チャタジに對して起した謀叛で、新總督が着任した次の日の夜に勃發した。つまり、新任者を少々おどしておこうというのが動機だったそうであるが、反亂軍兵はスワイカ區に集結し、やみくもに發砲しはじめた。市民はそれぞれの町を閉鎖

して小さくなっていると、翌朝、反亂兵は總督官邸にせまって銃を射ちはじめた。總督も強情な男で、エニチェリ軍團に主謀者を引渡せと要求した。それが拒絶されると、手兵をひきいて逆襲し、反亂軍を撃退したのみでなく、相當多數を殺した。それだけならばよいが、勝に乗じて一般市民の家々を掠奪し「老も若きもとわず、手當り次第に殺したり、捕えたりし、財寶をかすめ、人妻や娘を辱かしめ、その寶石類を奪った」。まことにタメルラの侵入時以來、ダマスクスがこのような災厄にかかったことはこれが始めてであったというのである。このようなとき、政府側が勝とうが、反亂軍か勝とうが、ひどい目にあうのはいつも罪のない一般市民であったともいっているそうである。

荒野に住むベドウィン(遊牧民)も厄介な存在だった。大體ダマスクスは四通八達の地だし、ことにメッカ巡禮にはここを基點としてアラビアに向うものが多數あった。それで毎年のアミール・ル・ハッジ(巡禮團の指揮者)にはダマスクスの總督がなるのが恒例であつた。アサード・パジャは、途中のベドウィンに金帛を贈って

渡りをつけていたから、無事だった。ところがこの人が
轉任になって、フサイン・マッキーが後任となると大事
件がおこった。つまり一七五七年の巡禮團は北アラビア
のタブーク附近でベドウィンに包圍され、持物は掠奪さ
れ、死傷者を出し、多數が裸にされ、食物もなく砂漠に
立往生という悲惨さにおち入った。所が親方の記録によ
ると、ベドウィンをそそのかして襲わしたのは外ならぬ
アサード・パシャその人で、こうして自分の後任者にけ
ちをつけ、自分の在職中の手腕を認めさせたかったのだ
というから恐ろしい。トルコ皇帝がアサードの所業にあ
きれば、これを葬り去る心をきめたのもこの事件によ
ってだというのが一般の噂だった。しかし親方による
と、それは真相でなく、トルコ皇帝は、アサードが長い
在任中しこたまためこんだ財産を没収したかったので、
その不評判を奇貨おくべしとしたのであるという。皇帝
はアサードを小アジアのシヴァスに轉任させた後、ひそ
かに刺客を送って消してしまっただが、これはサルタンの
常套手段だったともある。

三

前述のようにアサードは在任中、壯麗なおのが居館を
ダマスクスに營み、現在でも名勝の一つとなっているほ
どである。親方によるとこの工事には殆ど全市の職人た
ちが動員され、建築材料は市場から姿を消してしまっ
た。アサードは部下をそちこちに派遣し、格好な大理石
の敷石、圓柱、噴水などがあると、遠慮會釋なく、とり
こわして徴發した。ウマイヤ朝創業のカリフ、ムアーウ
イヤの宮殿などもこのときとりこわされた。ダマスクス
郊外にこわれた水車場があって、そこに面白い石材や圓
柱があったのであるが、それらをほしいばかりに十二日
間もかかって、川をせきとめ、大に附近の住民をこまら
せたという。

このような悪代官の外、暴徒、強盜、收賄、疫病、蝗
害、地震などが入りかわり立ちかわって人民を苦しめ、し
かも人民には頼りになる權威者というものはなかった。
政府が何もしてくれぬから、蝗の大群が襲ってきて、
人々はただあるだけのものを燃してふせぎ、あとはひた
すら神だのみという有様であった。ことに一七四七年に
はダマスクス近郊は恐ろしい蝗害をうけ、みんな泣いて

アッラーにすがっていたが、その最中、總督官邸では何か舞踊の催しが行われていたという。

一七五八年には大地震があった。民家は多く倒壊し、大抵のモスクの光塔もおれ、ウマイヤ・モスクの大圓蓋も城樓もくずれて、人々は郊外の菓樹園や山地、墓地などに避難した。

それから數カ月すると、今度はラマザンの斷食月だというのに、悪疫がひろがりはじめた。親方の記録によると、一カ月以上にわたり毎日ダマスクスの各城門からそれぞれ一千もの柩が送り出されていった。まことに前代未聞のことだったと歎いている。

以上は若干の例であるが、これでもわかるように床屋の親方アハマド・アル・ブダイリーの日記は十八世紀中ごろのシリアの社會を活寫した好記録である。かつまたこれは、シリアだけでなく、ひろくアラブ世界の生きた状態を想像させる好史料でもあるが、この日記が書かれてから、約一世紀たって、はじめてレバノンなどにアラブ民族の自覺がはじまり、更にそれから長い歲月をけみし、やっと最近になって、近代化の徴候がはっきりして

くるのである。まだまだこの日記にえがかれたような社會状態はかなり濃厚に残っていると見てよいであろう。アハマド親方の日記の出版もいずれば行われるであろうが、この小文はイスラミック・レビューの本年の四月號に載せられたハッダード G. Haddad 博士の記事を主な根據としたものである。それにしてもイスラム社會の長い間の停滞からして、イスラム教そのものに文化の進歩をさまたげる何ものかがあるのではないかという説も行われた。この日記などに見ると、そういうことよりもむしろ原因はトルコ時代の地方政治の弊害にあったので、無氣力な民衆は自分たちを次々と襲う災難にただ脅えおののき、宿命論にわずかの慰めを見出し、アッラーの加護を最後のよりどころとしていたらしく思われる。まことに救いのない社會だった。こういう中からアラブの民族思想が芽を出してきたのであるから、その根は深いものといわなくてはならぬ。